

赤米ニュース

第270号

(2019年9月30日)



東京赤米研究会

〒186-0005 東京都国立市西3-7-29 アゼリア国立2-101 長沢方(Tel042-577-6855)

9月の赤米作り	-----	2158
おしらせ	-----	2160
おたより	-----	2161
稲の収穫祭と神社信仰 (XI)	-----	長沢利明 2162
表紙解説：ニッポン寿司列島⑨一柿の葉寿司 (和歌山県)	-----	2164

9月の赤米作り

●9月の赤米稲作りのポイント

赤米作りも、いよいよ最終段階に入ってきました。今月は赤米稲にも花が咲いて、稲穂が稔り始めます。豊かな収穫の秋を迎えるために、今回は出穂・開花期の諸注意を解説しておきましょう。

●出穂・開花期の赤米稲

赤米稲の出穂・開花はたいていの場合、9月初旬頃にいっせいに始まり、いっせいに終わります（品種によっては7～8月に開花するものもあります）。苗の草高はこの時点ですでに1mを越え、1m20cm～1m50cmほどになっていますが、茎の先端に細くて短い、槍のように尖った最後の葉が、1枚あらわれます。これを「止め葉」といい、これが出てくると、いよいよ出穂が始まるサインです。出穂の当日朝、止め葉の根元から稲穂が伸び出しますが、赤米稲の穂には長い芒があるので、まずはその芒の先端が姿をあらわします。赤く細いブラシの毛のようなものが、茎の先から飛び出しているのが見えたら、いよいよ出穂の始まりです。

ものの2～3時間で、穂はスルスルと伸び出して完全に止め葉の根元から離れ、ピンとまっすぐに立った状態で、その全容をあらわします。時には長い芒が茎の先端部にひっかかって、うまく出穂できないこともあります。人間が手伝ってやらなくとも、自然に内側から押し出されていきますので、放っておきましょう。農家では稲穂を傷つけることのないようにと、出穂・開花時には決して田に入らないそうです。



写真9 赤米稲の開花

1本の稲穂は、この日の夕方までには出穂が完了し、早いものではその日のうちに開花を始めますが、たいていは翌朝から花が開きます。穂の上の方から蕾が縦に割れ、中から白い雄しべが外に飛び出します（写真9～10）。開花は上から下へと順に進んでいきますが、ひとつの花の開花時間はわずか1時間ほどで、すぐに開花が終了します。とはいえ、1本の穂にはたくさんの花がついていますから、上から下へと次々に順番に開花していくので、つねにいくつかの花が開いており、1～2日間は開花を観察することができます。一つ一つの花は開花中に自家受粉をおこない、雄しべの花粉が雌しべに付着して受粉がおこなわれるのです。こうして受粉を終えると花は閉じ、あとは結実・登熟へと向かいます。このように、赤米稲の出穂・開花はほぼ同時進行でおこなわれていきます。

●出穂・開花期の水の管理

出穂・開花期のミニ田んぼの水位は最大限にまで上げ、たっぷりと水を入れてやりましょう。この時期の水不足・土の乾燥は禁物です。プランターやバケツの水漏れがないかどうか、よくチェックして、つねに水を深く満たすようにしてやって下さい。

赤米稲の稲穂は、開花後4～5日で穂がばらけ、傾いて垂れ始めます。さらに10日もたちますと、すっかり実が入って稲穂が重くなり、ダラリと垂れ下がります。すべての稲穂が垂れ下がり、十分に実が入ると、もう田に水は不必要です。ミニ田んぼの水を完全に落とし、田を干して下さい。その後は、稲刈りの時の水田の土の状態に持っていけばよいのみで、これ以降はミニ田んぼにまったく水を入れなくて下さい。赤米稲の稲穂は、開花後1ヶ月で完全に実が熟しますので、ようやく稲刈りをすることができます。

●品種別の隔離

さて、ここで気をつけねばならないことがひとつあります。それは赤米稲の各品種の花粉が混じり合って交雑することのないように、それぞれのミニ田んぼを互いに離して隔離するという事です。複数の品種を同時に栽培しておられる方々は、出穂・開花が始まったならば、ただちにその措置を取って下さい。プランターやバケツを移動させ、互いにそれぞれの品種が隣接しないように、離して置いて下さい。

かつて通常稲の水田には赤米がよく混入し、それを根絶するために農家は非常に苦心を重ねてきました。品種どうしの隔離が不徹底ですと、そのようなことも起こり、湿地の深田や寒冷地での稲作に大きく貢献してきた赤米稲が、悪者・雑草扱いされてしまう結果を

もたりました。そこで私たちもまた、品種別隔離をきちんとやっておく必要があるわけなのです。

通常稲の田への赤米の混入現象は、実際には両者の交雑によって生じることはほとんどないといわれています。赤米稲は通常稲よりもずっと早い時期に開花し、開花期が重ならないので、交雑する可能性はきわめて低いわけです。しかも、すでに述べたように、稲の生殖は自家受粉によってなされるものですし、ひとつの稲の花の開花時間はわずか1時間に過ぎず、その間に他の株の花粉を雌しべが受粉する機会は（まったくないとはいえませんが）、まずほとんど起こらないといつてよいのです。とはいえ、万一の可能性に備えておくということは大切で、品種間の交雑を防止し、品種の純血性を保つためにも、隔離をおこなう必要があるわけなのです。また、隣り合うミニ田んぼの赤米稲からこぼれた種子が、土の中にまぎれて残存することもありますから、それをふせぐためにも隔離は必要です。

赤米は野生稲・雑草特有の性質を持っていて、その実は非常に脱粒性が高く、ぼろぼろとこぼれて散りやすいのです。田の土に残された赤米の種子が翌年発芽し、別品種と混じりあうことも考えられます。特に種子島種や武蔵国分寺種などは非常に脱粒性の高い品種ですので、収穫前にかなり多量の種子が穂からこぼれ落ちます。厳重な隔離をおこなって下さい。それぞれのミニ田んぼには、つねに単一の品種のみを栽培するようにし、その純潔性を厳格に維持していただきたいと思います。

●風倒防止対策について

出穂・開花時の防風対策は特に重要です。

図6 風倒防止用の支柱

草高も伸びてますます風害を受けやすくなってきている赤米稲の苗に、強風が当たって茎が傾いたり、倒れたりすることは、何としても避けなければなりません。これは出穂後の苗にかぎらず、その直前の穂ばらみの段階についてもいえることで、いったん風で倒れた稲はまずほとんど結実しませんし、稔ったにせよ中身のない空籾になってしまいます。台風の接近時に、バケツごと屋内に避難させることはいうまでもありませんが、ミニ田んぼそのものにも風よけ紐を張って、茎や葉が風の影響を受けることのないように、守ってやるとよいのです。あまり強い風の当たらない場所ならば、特にこれをおこなう必要はないのですが、心配であればやって下さい。風よけ紐の掛け方は、各自工夫していろいろやってみるとよいでしょう。ここではその一例を紹介します。

これはもっとも簡単な方法で、ミニ田んぼ内に何本かの支柱を立てて間に紐を張り、稲を支えてやるやり方です（図6）。支柱

は木や竹の棒を何本か立てればよいのですが、もっとも具合のよいのは朝顔などをからませるための、園芸店で売っているあの緑色の園芸用支柱です。紐は荷造り用の紐でよく、支柱の間に張りめぐらせて粗い網状にします。紐を張る高さは、ちょうど稲の穂首の下あたりの位置がよく、あまり低すぎでは効果がありません。稲穂が紐の上に顔を出すくらいの高さが適当です。こうしてやれば、多少の強風でも紐が支えてくれますので、稲が倒れたりすることがありません。

さあ来月には、いよいよ待ちに待った稲刈りを迎えることとなります。収穫の秋を、大豊作の喜びで迎えようではありませんか。もう一息ですから手抜きをせず、ラストスパートをともに頑張りましょう！

おしらせ

●わんぱく学校・赤米会の畑は順調

武蔵国分寺跡地内にある「わんぱく学校」の赤米畑では、先日の種まき以来、すでに1ヶ月以上が経っています。その後、赤米稲はすぐに発芽をし、ぐんぐんと苗が伸びて急成長を続けており、7月初旬の時点で、50～60cmにまで育っております。もう少し、雨が多



赤米会の赤米稲は順調に育っています



こちらは「わんぱく学校」の畑です

く降ってくれれば、もっとよく生育することでしょうが、東京では梅雨入り以来、晴天続きで、雨不足の状態が続いています。一方、わんぱく学校の畑に隣接する南側の国分寺赤米会の畑でも、きわめて順調に赤米稲が成長しており、見事な陸稲畑となっております(写真参照)。5月の種まき以来、すでに数回にわたって除草作業などもなされているとのこと。皆さん、お近くにお寄りの際は、ぜひこれらの赤米畑をご覧ください。

●恋ヶ窪公民館ではバケツ方式

国分寺市内の恋ヶ窪公民館でも、赤米稲が順調に生育中です。同公民館では本年の場合、昨年よりはやや規模を縮小して、バケツ栽培方式での赤米作りがおこなわれており、2階



10個のバケツが並びました

中庭に10個の「マイ・バケツ」を並べ、赤米セミナーレのメンバー10人が、赤米稲を育てておられます(写真参照)。

おたより

●猛暑が心配です(川口哲秀)

芒種の候、『赤米ニュース』ありがとうございます。6月5日、小さい田に苗を植えました。6月で7月の気温と言ってます。猛暑になるのでしょうか。心配です。昔の人たちも自然の中で作物を作っていたので、がんばって育てます(6/8:大阪府東大阪市)。

●現在リハビリ中(多久島 實)

『赤米ニュース』269号ありがとうございました。枚岡神社粥占神事の占記、「お米ギャラリー心齋橋(現在は閉店中)」の資料などを送ります。私は現在リハビリ中で、車イス使用中です。今後共よろしく願います(6/4:大阪府大阪市)。

●私は赤米メッセンジャー(安本義正)

『赤米ニュース』、いつもありがとうございます。このたびの第269号には、過分のお言葉をいただき、恐縮です。今でもあちこちからご連絡があり、細々と赤米メッセンジャーをやっています。今後とも赤米ファンの輪が広がることを願っています。退職後は、長年ほったらかしの家の修理や物の整理片付けでバタバタしていますが、そのうちに時間がとれるようになれば、いろんなことにチャレンジしたいと思います。暑さに向かいます。くれぐれもご自愛ください(6/4:京都府京都市)。

●赤米稲で実験中（高橋寿子）

その後、稲は丈をのばし、梅雨の空の中、美しく輝いています。私は実験をしまして、①バケツの中、②鉢に植えてプランターに半分沈めた状態のもの、そして③プランターにゴーヤと共に植えているという3種を育てています。最近、稲の葉の形状が変化し、中心に細いすどい葉が真すぐ伸びて来ました。この先どうなっていくのでしょうか。楽しみです（7/4：東京都国分寺市）。

稲の収穫祭と神社信仰(XI)

長沢 利明

6 天皇即位と大嘗祭・つづき

大嘗宮の建設費は19億700万円にも及びます。少しでも費用を節約するために、悠紀殿・主基殿の屋根を茅葺きから板葺きに変えたり、建物の規模を前回に比べて2割強縮小したりして、当初25億円はかかると見込まれていたのを、何とか19億円台にまで抑え込んだのだそうですが〔読売新聞社（編）,2018b〕、それにしても大変な金額ではないでしょうか。

たった一度の儀式に用いられるだけで、すぐに取り壊されてしまう建物に、巨額の国費が投じられることには批判が出されても当然で、平成の時にもおおいに物議をかもし、い



写真17 大嘗宮の悠基殿



写真18 大嘗宮の主基殿



写真19 大嘗宮の小忌幄舎

くつかの訴訟すら起こされたことを私たちは覚えています。大嘗祭は誰が見ても皇室主催の私的で宗教的な儀式なので、多額の国費がそこに支出されることは、憲法の定める政教分離の原則に抵触し、相当な無理があるわけで〔横田,1990:pp.126-128〕、もっともな反対意見といえるでしょう。政府の見解では、新天皇の即位の礼は国事行為であるが、宗教色の強い大嘗祭は皇室の私的な行事に属するので、国事行為としては認められず、そのための費用には、皇室の公的活動をまかなうための宮廷費をあてることにしたというのです。しかし、これもかなり苦しい解釈で、結局は国費が支出されるわけなので、自己矛盾だといわれても仕方ありません。

この点について大変注目されるのは、2018年11月における秋篠宮殿下の発言です。それ

は、「大嘗祭は皇室の私的活動費である内廷会計でおこなうべきである」との意見表明で、そのようにして憲法規定との矛盾をクリアしつつ、しかも「身の丈に合った形式でおこなうのが本来の姿」であるとし、過大な出費はつつしむべきであるとまで、殿下は言われたのです。長年の慣習を破って生前退位を表明し、スムーズな皇位継承の道を切り拓かれた今上天皇の英断にも等しい、それは勇氣ある発言ではなかったでしょうか。この私などは、まったくこの秋篠宮殿下の意見に賛同致しませぬし、それは次の次に天皇になられるお方の発言なのですから、重く受けとめねばならないと思います。しかるに、この発言に対し、宮内庁の長官らは「まったく聞く耳を持たなかった」とも、殿下は言っておられるのでして、大きな問題がそこに残されているのです。

私たち日本国民は、日本国憲法の唱える崇高な民主主義の精神にもとづいて、わが国の豊かで平和な社会をさらに発展させていかなければなりません。大嘗祭を取り巻く諸問題には、政教分離の問題が深くかかわっているのですから、見過ごすことはできないでしょう。国民そして納税者の一人一人が真剣にこの問題を考えていかなければならないと、私は思います。本物の大嘗宮を、皆さんにぜひその目で見ていただきたいと、先ほど私がおすすめしたのは、実はそのためでもあります。このような特別で巨大な施設を設けていとなまれる天皇の一世一代の大儀式とは何なのか、どのようにそれはなされていくべきなのか、などなどといったことをも、それを見ながらぜひ皆さんに考えてみていただきたいのです。それは、あるべき皇室の未来の姿を、さらには国民統合の象徴たる天皇をいただく日本という国の将来を、考えていくことにもつながっています。

おわりに

今日はずいぶんあちこちに話が飛んでしまい、少々まとまりを欠きましたが、稲の収穫とその感謝祭をめぐる諸問題には、日本固有の神社信仰と、その最高位の祭祀主体者である天皇の祭りということが大きく関わってくるので、実はとても大きなテーマがそこに横たわっているのです。話が大きくなってしまい、あちこちに飛んでしまうのも仕方ないわけなのでして、その点をご理解願えれば幸いです。今年はまだ平成時代が終わり、新たな時代が始まるという、大きな区切り目の年でもあるため、あえて大嘗祭の問題などにも言及してみました。

日本人は稲とともに生きてきた民族で、稲というものに格別な思い入れを抱いており、それは単なる主食穀物であるということ以上に特別な存在であったといわれております。民間の年中行事暦にも、色濃く稲作儀礼の体系が反映されていますが、皇室や伊勢神宮の祭事暦には特にその傾向が強くあらわれております。そもそも皇室行事というものは徹頭徹尾、稲作儀礼に傾いたものとなっているのでありまして、その最重要の地位を占める行事が年間最大の皇室行事である新嘗祭なのでした。いかに皇室がそれを重視・特別視してきたかは、一世一代の天皇即位儀礼が、新嘗祭の特別版である大嘗祭の挙行をもって完了することから見ても、あまりに明らかです。

皇室の新嘗祭と一般のそれとは、かなりその内容が異なっておりますが、江戸時代まではもっと大きな違いが見られたはずですが。全国津々浦々の神社でおこなわれてきた秋祭りや霜月祭りは、実は民間版の新嘗祭であったわけなのでして、要するにそれらは、新穀を神前に供えて感謝をするという素朴な収穫感謝祭の行事だったのです。明治時代における

国家神道の制度の完成にともない、皇室行事の独特な体系が全国にゆきわたって、どこの神社でも今見るような形での新嘗祭がなされるようになりましたが、それ以前に見られた素朴な収穫感謝祭のあり方にも、目を向けていって見る必要があります。なぜならば、そこにこそ、本当の意味での民間版新嘗祭の姿が残されているので、特に対馬や種子島そして岡山の古社などに細々と伝えられてきた、いわゆる赤米神事というものの持つ大切な意味と価値なども、そのような方向からとらえ直し、再評価がなされていくべきものであるに違いないと、私は考えているのです。長いお話になりましたが、ご静聴ありがとうございました。(完)

【付記】

本稿は東京都国分寺市の恋ヶ窪公民館の主催によって開催された、赤米講座における筆者の講演内容を加筆してまとめ直したものである。講座は「いにしえのお米に学ぶ—収穫と氏神様—」と題し、2018年10月11日(木)に東京都国分寺市西恋ヶ窪4-12-8の恋ヶ窪公民館講座室Ⅱにおいておこなわれた。講演にあたっては、同館社会教育主事の梅原 薫さんをはじめとする多くの方々から多大なご協力をいただいたので、ここに記して深謝申し上げる次第である。

引用文献

神社本庁教化広報センター(編),2018『国やすかれ 民やすかれ—天皇さまのおまつり—』,神社本庁。
国分寺市史編さん委員会(編),1983『国分寺市史料集』Vol.3,国分寺市。
熊野神社社務所(編),n.d.『熊野神社略史』,熊野神社。
村上重良,1977『天皇の祭祀』,岩波書店。
長沢利明,1983『年中行事』『戸田市史・民俗編』,戸田市。

長沢利明,2016『幻の赤米—武蔵国分寺種赤米稲の物語—』『幻の赤米—国分寺の稲作について—』,武蔵国分寺跡資料館。

長沢利明,2017『国分寺の赤米の20年(IX)』『赤米ニュース』No.248,東京赤米研究会。

日本随筆大成編集部(編),1978『随筆』『日本随筆大成(第三期)』Vol.20,吉川弘文館。

佐藤 高,1988『木場角乗りから、歳市の市へ—東京都十・十一・十二月—』『江戸っ子』No.60,アドフェイス出版局。

東京府北多摩郡役所(編),1912『北多摩郡誌』,東京府北多摩郡役所。

柳田国男,1963『稲の産屋』『定本柳田国男集』Vol.1,筑摩書房。

横田耕一,1990『日本国憲法と大嘗祭』『歴史読本』Vol.35-15,新人物往来社。

読売新聞社(編),2018a『皇位継承関連144億1800万円—前回より増加—』『読売新聞』12月21日号夕刊全国版,読売新聞社。

読売新聞社(編),2018b『大嘗祭経費27億円—平成より2割増—』『読売新聞』12月23日号夕刊全国版,読売新聞社。

【表紙解説】ニッポン寿司列島⑨—柿の葉寿司(和歌山県)—

和歌山県は寿司王国で、県内各地に伝統的な郷土食としての名物寿司がいろいろ見られる。中でもユニークなのは柿の葉寿司であろう。鯖や鱈の押し寿司を、若い柿の葉で一つずつ包んで巻いた珍しい寿司で、このようなものは他県にはまったく見られない。柿の葉には食品の防腐効果があるという。また、柿の若葉の香りが寿司に移って、何ともしがすがしい。最近では東京でも売られている。寿司をひとつ手に取って、柿の葉を剥く時、中から何の寿司が出てくるかがお楽しみで、いろいろな寿司がそこに入っている。